

ヴァンダナ・シヴァのコモンズ論における生命の概念について

経済・経営学系教授 片山 博文

キーワード：ヴァンダナ・シヴァ、コモンズ、ポランニー、生命、多様性、エコフェミニズム、イリイチ

はじめに コモンズ論における「実体」と生命

経済人類学者カール・ポランニー (1886-1964) の業績は、その「自己調整的市場」をめぐる一連の論考によってよく知られている。市場経済が労働・土地・貨幣という本来的には商品でないものを商品化し、社会から経済を離床させることによって成立しているものであること、その弊害を克服するためには、経済を社会に「埋め戻す」必要があることを唱えるポランニーの理論は、反市場的なスタンスをもつ共同体志向のコモンズ論に大きな示唆を与え続けてきた。その意味で、ポランニー自身は「コモンズ」という言葉を用いてはいないが、ポランニーの理論をコモンズ論の重要な一理論として位置づけることは十分可能であろう。

ところで、ポランニーはその主著『大転換』(1957)において、「実体」(substance)という概念を再三にわたって用いている。たとえば彼は、自己調整的市場は「社会の人間的・自然的実体を無にしてしまうことなしには、一時たりとも存在しえない」と述べ、「商業社会における機械制生産は、実際、社会の自然的・人間的実体の商品への転化以外の何物も意味しない。…そのようなからくりによって引き起こされる混乱は人間諸関係を解体し、人間の自然環境に絶滅の脅威を与えるにちがいないのである」(ポランニー 1957:4, 55)と述べている。ここでポランニーは、「社会の人間的・自然的実体」が自己調整的市場を通じて商品化され、分断・破壊される、というイメージを描いている。市場経済における労働とは、社会の「人間的実体」を商品化したものであり、土地とは、社会の「自然的実体」を商品化したものである。「労働はあらゆる社会をつくりあげている人間そのものであり、土地はそのうちに社会が存在する自然環境そのものである。したがって、それらが市場メカニズムに包摂されるということは、社会の実体 (substance of society) そのものが市場の諸法則に従属させられることを意味するのである」(ポランニー 1957:96)。その際、ポランニーは、商品化される労働・土地と、その元となっている人間的・自然的「実体」との関係を、肉体的・精神的存在としての人間や、個々の要素が総合的に結合したものである自然から、その一部をいわば引きはがしたものとイメージしているようである⁽¹⁾。

ポランニーは、ここではこれ以上、「実体」という概念の詳細について論じてはいない。しかし、明示的にせよ暗示的にせよ、彼がこの言葉を西洋哲学における「実体」概念の歴史を

背景にして用いていることは確かであろう。周知のように「実体」は、西洋哲学における最も重要な概念の一つであった。とくに西洋近世は、実体に関する様々な思想が花開いた時代である。デカルトは実体の本質を自立性・非依存性に求め、ライプニッツはその本質は活動性にあるとし、またスピノザは、実体をすべての物の起成原因であるとした。このように、実体の本質規定についてはそれぞれに相違があるものの、これらの思想はみな、物の背後にそれを成立せしめている何らかの基体があるとし、それを実体と呼んだのである⁽²⁾。おそらくポランニーもまた、こうした「実体」のイメージを念頭において上述の議論を展開したものと考えられる。

そこで、社会の人間的・自然的「実体」とは何か、という点に焦点を当てたコモンズ論をいまかりに「実体論的コモンズ論」と呼ぶことにすると、ここには、社会理論としてのコモンズ論に関して、通常の経済学的なコモンズ論とは異なる理論的枠組みの可能性が示されているように思われる。通常の経済学的なコモンズ論とは、人間による自然の管理制度に関する理論である。そこでは、人間と自然の相互分離性と、所有・労働における主体としての人間および客体としての自然という二分法が前提され、その下で資源配分や生産・消費・分配のあり方、人間による自然のガバナンス方法などが議論される。また経済学的コモンズ論においては、ポランニー的な「離床」や「埋め戻し」といった概念は、自然資源の共同体管理から市場管理への移行（＝離床）および市場管理から共同体管理への復帰（埋め戻し）としてイメージされることになる。

これに対して、実体論的コモンズ論の問題意識と視点はより根源的である。実体論的コモンズ論における「離床」は、自然の共同体管理から市場管理への移行だけではなく、何らかの共通の「実体」から人間と自然が分離する過程、また、人間から労働が、自然から土地が分離する過程そのものを問題とする。また同理論における「埋め戻し」も、自然資源の市場管理から共同体管理への復帰だけではなく、人間と自然それぞれの総合性の回復、さらには人間と自然の間の一体性の可能性を問題とする。実体論的コモンズ論における離床・埋め戻しは二段階の過程なのである。

実体論的コモンズ論における「コモンズ」と「実体」との関係は、器とその中身の関係に例えられるかも知れない。この場合、器の中身としての「実体」として何を想定するかで、様々なコモンズ論が類型化されることになるであろう。

本稿では、実体論的コモンズ論の代表的な取り組みとして、インドの女性思想家ヴァンダナ・シヴァ（1952-）のコモンズ論を取り上げる。反グローバリズムの活動で知られる彼女は、この間「生命」（life）の概念を中心に据えた「生命論的コモンズ論」と呼ぶべき独自のコモンズ論を展開してきた。その議論は、自然資源の経済学的管理を問題とする経済学的コモンズ論の枠を超えて、人間と自然の関係そのものを問う根源的なものであり、実体論的コモンズ論と呼ぶにふさわしい内容を有している。また彼女の理論を実体論的コモンズ論としてみた場合、それはコモンズの「実体」に生命の概念を据えたものとしてとらえることができよう。

以下本稿では、まずヴァンダナ・シヴァのコモンズ論の理論的変遷を、「女性原理」に基づ

くコモンズ論から「生命原理」に基づくコモンズ論への発展としてとらえ、それぞれの代表的著作として『生きる歓び』と『アース・デモクラシー』を取り上げ、その内容を紹介する。次に、「生命」の概念に批判的であった代表的論者であるイヴァン・イリイチの議論を検討し、それとの比較を通じてヴァンダナ・シヴァの生命論的コモンズ論の特徴を明らかにする。以上の検討から、「生命」の概念をコモンズ論、より一般的には社会理論に導入することが、どのような可能性と射程を有しているかを展望したい。

1. ヴァンダナ・シヴァのコモンズ論 (1) ー女性原理的コモンズ論

彼女の初期の著作である『生きる歓び』(1988)は、エコフェミニズムの立場から環境破壊を論じたものである。いま、実体論的コモンズ論の第1フェーズである、実体からの人間・自然関係の生成過程に注目して、本書の内容をまとめるならば、それは以下の3点に集約されるであろう。

第1に、コモンズ論の基礎をなす実体的論理として「女性原理」(feminine principle)が据えられていることである。本書において彼女は、インドの伝統的宇宙論に依拠し女性原理を展開している。インドの宇宙論において自然は「プラクリティ」(Prakriti)という言葉で表される。プラクリティとは「生命を支える生きた力としての自然」であり、「そこからすべての生命があらわれるという女性原理 the feminine principle from which all life arises」を表すものである。彼女によれば、女性原理の具象・顕示であるプラクリティは、①創造性、活動性、生産性、②形態と相の多様性 diversity in form and aspect、③人を含むすべてのものの結合と相互関係、④人間と自然の連続性、⑤自然における生命の尊厳 sanctity of life in nature をその特徴としている。この自然観は、「生命原理としての女性性の存在論 an ontology of the feminine as the living principle」と、社会と自然の存在論的連続性 an ontological continuity between society and nature—自然の人間化と人間の自然化—を基礎にしておき、その下で、女性と自然は「生命の生産者」(producers of life)として社会的生産の中心的役割を担ってきた(シヴァ 1988:6-7, 59, 61)。

第2に、彼女によれば、この実体的な女性原理を変容させ、ポランニー理論における「離床」をもたらす中心的な主体ないし推進力は「西欧的家父長制」(western patriarchy)である。彼女は、近代における開発と科学は、西欧的家父長制による企みに他ならないと指摘する。「開発」とは、「近代西欧の家父長制的経済ビジョン modern western patriarchal economic vision のもとで富を増やしていく企ての拡張」であり、このビジョンは「女たちの搾取ないしは排除、自然の搾取と劣化、他の文化の搾取と崩壊」を基礎とするものであるとされる。すなわち西欧的家父長制は、女性と自然が生命の生産者として本来持っている生産性や活動性を否定し、それらの本質を「受動性」(passivity)と規定することによって搾取を正当化した。だが実際には、西欧的家父長制による開発は、生命の破壊をもたらす「負の開発」(maldevelopment)に他ならず、それが進歩的・普遍的なものとみなす生産性や成長といったカテゴリーは、実際には家父長制の視野の狭いカテゴリーである(シヴァ 1988:16-18, 22)。

さらに、労働のみを価値の源泉とするアダム・スミス以来の労働価値説もまた、経済学における家父長制の反映である⁽³⁾。

第3に、西欧的家父長制が女性原理にもたらす中心的作用は「還元主義」(reductionism)であり、とくに近代科学の還元主義的な性格が徹底的に批判される。彼女は、15世紀から17世紀の科学革命として現れた近代科学の還元主義あるいは機械論的なパラダイムは「西欧の男性がもくろんだもの」とであると述べ、「文化と自然、心と物、男と女に分けて二元論的にとらえ、前者が後者を服従させるという概念的な戦略をつくりあげた」と批判する。還元主義は、自然を無気力で断片化された「物」inert and fragmented 'matter' として操作し、自らを更新して再生する自然の能力を低下させ、自然を「環境」または「資源」とみなすデカルト流の考え方をもたらした。デカルト的自然観においては「環境が人間から切り離されて人間の構成要素ではなくなり、人間を取り巻くもの」になっている。そこでの自然は、「①無気力で受け身であり、②均一的で機械論的であり、③それ自身は分割可能で断片化していて、④人から切り離され、⑤人間によって支配されその利己の利用に供される下等なもの inferior, to be dominated and exploited by man」となる。また資本主義経済は、還元主義の経済的側面における現れである。資本主義は専門化した商品の生産を基礎にしているため、生産では均一性 uniformity が、天然資源の利用では単一機能の利用が要求される。つまり還元主義は「複雑な生態系を単一の構成要素に還元し、単一要素を単一の機能に還元する」のである。そして、還元主義の究極的な形態は「貨幣をもって価値や富を測る唯一の尺度とするような経済活動のなかに、自然が組み込まれてしまった状況」である。そこでは「経済の組織化原則としての生命は消滅する Life disappears as an organizing principle of economic affairs」こととなる(シヴァ 1988:38- 41, 58)。

以上が、ヴァンダナ・シヴァのコモンズ論の、実体論的コモンズ論第1フェーズに関する主な内容である。それは、①実体の原理としての女性原理、②離床主体としての西欧家父長制、③中心的作用としての還元主義、とまとめられる。

ヴァンダナ・シヴァの女性原理に基づくコモンズ論は、近代的自然観や経済学の諸概念のとらえ直しにつながる多くの興味深い論点を含んでいるが、それらの中で最も重要であると私が考えるのは、「多様性」(diversity)の観点からする近代および市場経済の批判である。生物学的・文化的多様性の保護は、ヴァンダナ・シヴァのコモンズ論における中心的主張の一つである。例えば「精神のモノカルチャー」をもたらす緑の革命や、種子の多様性と自由を奪う遺伝子組み換え作物などの種子支配に対する批判は、彼女が最も精力的に取り組んだ現実課題であった。女性原理に基づく多様性の重要性についての認識が、こうした実践を支える理論的なバックボーンであったことは明らかである。『生きる歓び』の中でも、多様性の問題は再三にわたって論じられているが、例えば彼女は次のように述べている。「自給自足の条件のもとでは男女の異なった仕事の領域が、不平等ではなく、多様性にもとづいて相互に依存し補完しあうという特質をもっていた。負の開発が多様性におけるこの平等性をゆるがし、西欧的技術人間 western technological man が観念的に作り出したカテゴリーを階

級や性、文化の価値を測る唯一の尺度にしてしまったのである。還元主義、二元性 duality、単線性 linearity を基礎にした今日の認識方法では…多様性および多様性の中での統一と調和 diversity, and unity and harmony in diversity が認識論的にみて不可能になる」(シヴァ 1988:19-20)。

従来の中心的な実体論的コモンズ論であったボランニーのコモンズ論においては、離床の主要な作用は「商品化」であり、商品化は離床とほとんど同義の言葉として認識されていた。商品化の視点は、人間と自然の「断片化」(fragmentation) による人間・自然破壊を論ずる上では非常に有効な視点ではあるが、人間文化や自然の多様性をあつかう上では、十分に機能するものではなかったと思われる。商品化の論理は、多様性の論理とただちに結びつくものではないからである。ヴァンダナ・シヴァの女性原理に基づく実体論的コモンズ論は、西欧的家父長制の経済面における作用として、市場経済の商品化作用にももちろん言及しているが、同時に、市場経済の画一化・均一化作用による多様性の破壊も商品化と同じように重視している点にその特徴がある⁽⁴⁾。その意味でヴァンダナ・シヴァのコモンズ論は、近代の本質を「商品化」に求めるマルクスの問題関心よりも(あるいはそれと同時に)、近代の本質を「合理化」に求めるウェーバー的な問題関心との親近性が強いと言うことができよう⁽⁵⁾。

他方、彼女のコモンズ論の問題点は、女性原理を実体的原理としているがために、人間解放の戦略としての普遍性に欠けている点にある。例えば、エコロジー闘争を行う女性たちは「普遍性を主張する家父長主義の主張に対して、別の普遍的な主張で対抗しようとしているのではない。その武器は多様性である」(シヴァ 1988:7) という言葉にも示されているように、彼女は普遍性と多様性に関して < 男性原理 = 普遍主義、女性原理 = 多様性 (反普遍主義) > と定式化している。そのため、多様性の主張が、閉鎖的なローカリゼーションの主張にとどまっているのである。また女性を「生命の生産者」と規定しているために、生態系の保全や調和を重視する自給自足的自然経済の復権が、もっぱら女性性の再建としてとらえられており、男性を含めた全人間的な普遍性を欠く主張となっている。またヴァンダナ・シヴァは、家父長制に基づく還元主義と女性・自然迫害の現代における具体例として、しばしばインドの農村社会を引き合いに出している。確かに、女性が自給自足的自然経済を担っている途上国社会の変容を批判的にとらえる上では女性原理は有効であるが、もはや必ずしもそうした特徴をもっていない先進国において、経済の自給自足性や自然性を見直す上では、女性性を過度に強調することは、むしろ逆にマイナスの影響をもたらしかねないのである。これらは、女性原理が「離床」の論理としては有効であっても、「埋め戻し」の論理としては必ずしも有効ではないことを表しているように思われる。

2. ヴァンダナ・シヴァのコモンズ論 (2) —生命原理的コモンズ論

2005年出版の『アース・デモクラシー』は、彼女の20年近くにわたる理論的営為を集大成したものである。彼女は「アース・デモクラシー」(Earth democracy) を「平和と公正、持続可能性を求める政治運動」と規定している(シヴァ 2005:11)。本書の記述や論点は多岐

にわたるが、その実体的論的コモンズ論としての内容に注目すると、本書の実体的コモンズ論の基本的な理論構造は『生きる歓び』におけるそれとは大きく異なっている。

すなわち第1に、実体的原理として、女性原理の代わりに「生命原理」(living principle)が据えられていることである。彼女によれば、アース・デモクラシーは世界中の先住民文化にみられる「大地に支えられているあらゆる生き物の共同体 the community of all beings supported by the earth」「大地の家族 the earth family」という考え方を取り入れている。先住民は、生命を「人間と非人間種、過去・現在・将来世代の間にある連続体⁽⁶⁾ a continuum between human and nonhuman species and between present, past, and future generations」として理解し経験してきた。彼女は、アース・デモクラシーの3つの構成要素として、「生命中心の経済」(living economy)、「生命中心の民主主義」(living democracy)、「生命中心の文化」(living culture)を挙げる。生命中心の経済とは「大地の資源を公平に分配し、食物と水という必需品をもたらし、意義のある生業を創出するさまざまな過程や場」であり、生態系の再生産機能である自然の経済を基盤とし、地域住民の生態系と調和した経済である生命持続の経済、そして市場経済の三層構造から成る。また生命中心の民主主義とは「私たちが自らの根源的自由を取戻し、基本的権利を擁護し、地球上の生命を保護し、平和を守り、公正を推し進めるという共通の責任と義務を遂行する場」であり、生命中心の文化とは、多様性を形成しそれを生きる場であると同時に、人間と非人間種が「共有しているものを完全に包みこんでいる場」でもある。(シヴァ 2005:11-12, 20-21)。これらはそれぞれ、経済・政治・文化の領域における生命原理の発現である。

第2に、『アース・デモクラシー』において離床の主体ないし推進力として認識されているのは、「企業グローバリゼーション」(corporate globalization)である。企業グローバリゼーションは、生命中心の経済の土台である自然の経済を掘り崩し、市場経済を拡大させて経済を不安定にする。多様な生態系と結びついていた肯定的な文化的アイデンティティは失われ、「他の何々ではない not the other」という「否定的アイデンティティ negative identity」が支配する。また企業グローバリゼーションは、草の根の民主制、国家の民主制度を破壊し、「企業による管理と経済独裁制 economic dictatorship」を招く。さらに企業グローバリゼーションは、画一的文化(monoculture)の強制をグローバルに推進する。それはマクドナルドやモンサントによる食のモノカルチャーであり、服装や交通のモノカルチャーである(シヴァ 2005:22, 150, 199)。

第3に、企業グローバリゼーションは、生命から「生き生きとした状態を保つ自由」(the freedom to stay alive)を奪う。アース・デモクラシーと企業グローバリゼーションの戦いは、「生命対反生命 life versus antilife」の勢力争いである(シヴァ 2005:328)。そこにおいて、企業グローバリゼーションの反生命性は、様々な作用として現れる。まず、企業グローバリゼーションは、地球コモンズを私有化・商品化し、その「囲い込み」(enclosure)を行おうとする。これは地球を私的所有物とみなす考え方であり、豊穡の文化に代わって排除と強奪と欠乏(希少性 scarcity)の文化をつくる。企業グローバリゼーションは、あらゆる生き物や資

源を商品に変えてしまうが、その背後には、「生物を、それ自体に価値を備えたもの、それ自体で完成されたもの、それ自体が主体性をもつものとはみなさない世界観 a worldview in which life forms have no intrinsic worth, no integrity, and no subjecthood」がある。それは自然破壊や過激主義・テロリズムなど、「死に向かう文化 suicidal culture、死に向かう経済、死に向かう政治」を生み出し、暴力の悪循環をもたらす。また、企業グローバリゼーションは、生態環境や共同体にねざした自己の個性の感覚である肯定的アイデンティティを失わせ、それを否定的アイデンティティに変えてしまう（シヴァ 2005:14, 19, 149-150）。それは一言で言えば、「アライヴネス＝生き生きとした状態」（aliveness）の消滅ということになる。

以上が『アース・デモクラシー』におけるコモンズ論の概要である。これまでの記述から明らかなように、『生きる歓び』と比較すると、本書ではその論理構造が①実体的原理：女性原理から生命原理へ、②離床の主体：西欧の家父長制から企業グローバリゼーションへ、③作用力：還元主義からアライヴネスの消滅、と大きく変化している。

とくに重要と思われるのは、コモンズの保全と破壊をめぐる対抗軸が＜男性－女性＞から＜企業－生命＞へ、マルクス経済学的に言えば＜資本－生命＞と変化したことである。すなわち、『生きる歓び』におけるエコフェミニズムの観点が後景化し、代わりに市場原理とコモンズ原理の対立が前面に押し出されるようになり、それぞれの原理の「実体」に資本および生命が据えられる、という図式が示されている。この問題把握の相違は、例えば、コモンズを破壊する動力の問題に現れている。コモンズの破壊とはその断片化と画一化であるが、その際には常に「暴力」（violence）が行使されているというのが、彼女の一貫した視点である。しかし、その暴力を行使する動力は、女性原理的コモンズ論においては、西欧の植民地主義や帝国主義、家父長主義、そして還元主義という、多分にイデオロギー的な要因に求められていた。これに対して、生命原理的コモンズ論では、コモンズの私有化や商品化だけでなく、その合理化・画一化の動因としても、企業＝資本の利潤原理が中心に据えられている。言い換えれば、女性原理的コモンズ論では資本の利潤原理が家父長制という本質の現象形態とされていたのに対して、生命原理的コモンズ論では、逆に家父長制が資本原理の現象形態として把握されるのである⁽⁷⁾。

この生命論的コモンズ論とでも呼ぶべき新たなアプローチの最も興味深い点は、企業グローバリゼーションに対抗すべく、生命概念に基づくグローバル性の新しい基礎づけが試みられている点である。それは彼女の「大地に支えられているあらゆる生き物の共同体」という言葉に端的に表現されている。「生命中心の文化は大地から、特定の場所と空間から生まれるが、同時に大地の家族の一員であるという地球規模の意識の中で、全人類を結びつける connecting all humanity in a planetary consciousness of being members of our earth family」のである。生命は私たちに「地球的アイデンティティ」（earth identity）を与え、それは「熱く、激しく生命を愛するよう、私たちに励ます it encourages us to love life fiercely and passionately」（シヴァ 2005:23, 26）。このように、女性原理的コモンズ論では反グローバリズムの立場にとどまっていたものが、生命原理的コモンズ論では、単なる反グローバリ

ズムの立場を超えた、新たなグローバリズムの観点が打ち出されているのである。この市場原理に基づくグローバリズムとは異なるグローバリズムの独自の観点は、従来の代表的な実体論的コモンズ論であるポランニー理論においてもみられないものである。そこで、この生命原理に基づくグローバリズムを、ここではかりに「生命のグローバリズム」(living globalism) ないし「生命グローバリゼーション」(living globalization) と呼ぶことにする。

生命のグローバリズムという概念は、いくつかの興味深い論点を含んでいる。第1に、この概念の下では、女性原理的コモンズ論における＜普遍主義＝男性原理、多様性＝女性原理＞という図式は、＜企業普遍主義＝画一性、生命普遍主義＝多様性＞という図式へと再整理されることになる。企業グローバリゼーションが、生物や文化の多様性を破壊し、画一化と均一化をもたらすのに対して、生命グローバリゼーションは、ローカルな生態系や文化の多様性の源泉である。生命の概念は「特殊と普遍、多様と共通、ローカルとグローバルを結びつける」(シヴァ 2005:11) のである。

第2に、生命のグローバリズムという概念が有する宇宙論的視野である。彼女はアース・デモクラシーを「私たちがローカルに根を張っていると同時に、全体としての世界にもつながっていること、そして、じつは全宇宙ともつながっていることの自覚 the consciousness that while we are rooted locally we are also connected to the world as a whole, and in fact, to the entire universe」を表現するものであり、「生命の永続的な再生をととして私たちを結びつける。私たちの日常生活を、宇宙全体の生命にまで結びつける Earth Democracy connects us through the perennial renewal and regeneration of life- from our daily life to the life of the universe」ものであると論じている(シヴァ 2005:20, 26)。彼女は、ここでいう宇宙生命とは何であるのか、宇宙とわれわれがつながっているとはどういうことなのかを、これ以上論じてはいない。ただ、彼女が生命のグローバリズムというコンセプトのうちに、企業グローバリゼーションを超えるスケールの大きさを展望していることは確かであろう。

しかしそれにも関わらず、第3に指摘すべきは、彼女が生命のグローバリズムの根拠ないし源泉を、先住民の伝統文化という反近代的なものに求めている点である。生命のグローバリズムが有する宇宙論的視野は、近代において獲得された宇宙論的自己認識の視点、例えば「宇宙船地球号」のそれと通じ合うものであるが、決して人類の宇宙科学の発展や宇宙開発それ自体からもたらされたものではない。生命のグローバリズムは、企業グローバリゼーションとは異なって、近代が獲得した概念ではなく、むしろ近代化とともに失われた概念なのである。それが、現代における人間の宇宙的視野の拡大によって、再び「実体」としてのリアリティを獲得したのである。

第4に、以上のことは、ヴァンダナ・シヴァのコモンズ論の「埋め戻し」のイメージに、独特な性格を与える。ポランニーのコモンズ論においても、近代以前の伝統社会における人間と自然の一体性に関する認識がみられる。例えば彼は、『大転換』において「伝統的には、土地と労働とは切り離されてはいない、すなわち、労働は生活の一部をなし、土地は自然の一部であり、生活と自然とは結合してひとつの全体をなしている」(ポランニー 1957:243) と

述べている。しかしこれは、生命のグローバリズムにおけるような、人間と自然の生命としての一体性ではなく、「人間の諸制度に解きがたく織り込まれた自然の一要素」(ポランニー 1957:243)としての土地である。つまり、ポランニーにおける「埋め戻し」とはあくまで制度的な概念であり、それゆえ彼の伝統社会に対する主たる関心も、互酬や再分配といった交換とは異なる経済的制度の様式に向けられたのであった。これは、ポランニーの「埋め戻し」における反近代主義が、人間の歴史的諸制度に依拠するものとして、基本的に伝統回帰的なものであったことを意味している。

これに対して、ヴァンダナ・シヴァのコモンズ論における「埋め戻し」の中心的コンセプトは、単に経済的制度の構築にとどまるものではない。それがめざすものは、生命への人間の回帰である。それは反近代的ではあるが、決して単なる伝統回帰ではない。生命のグローバリズムは、過去の伝統社会に局限されるものではなく、人類に歴史貫通的・超越的に臨在するものだからである。他方、それはポスト近代的な概念とも異なる。生命のグローバリズムは近代にとってある新しさをもっているが、その「新しさ」とは、近代の企業グローバリゼーションの次の時代に現れるべき、ポスト近代としての歴史的発展段階に対応する新しさという意味ではない。生命のグローバリズムは、企業グローバリゼーションとは違って、人類がその歴史的・科学技術的発展によって獲得したという類のものではないからである。すなわち生命のグローバリズムの新しさとは、キルケゴールの言葉を借りれば、人類にとっての「逆説的・超越的な新しさ」なのである⁽⁸⁾。そしてそのようなものとして、生命のグローバリズムは、近代の企業グローバリゼーションを、より広大な宇宙論的視野をもって超近代的に乗り越える契機を有している。

生命のグローバリズムの概念は、多様性の概念とならんで、ヴァンダナ・シヴァの生命論的コモンズ論が実体論的コモンズ論にもたらした独自の概念なのである。

3. イリイチの生命批判について

これまでヴァンダナ・シヴァの生命論的コモンズ論について論じてきたが、社会理論に生命の概念を導入することに批判的な論者も存在する。ここではその代表的論者として哲学者イヴァン・イリイチ (1926-2002) を取り上げる⁽⁹⁾。イリイチの生命批判は彼女に直接向けられたものではないが、彼女の生命論的コモンズ論の特徴をより明確化する上で、多くの有益な論点を含んでいると思われるからである。以下、イリイチの論文・講演集である『生きる思想』(1991)における講演「『生命』の偶像礼拝—『人間生命』という新しい偶像礼拝の制度的構成—」および彼へのインタビューにより編集された『生きる意味』(1992)の第10章「偽神と化した『生命』」を主要なテキストとし、彼の主張を検討する。

イリイチの生命批判は、以下の3点に集約することができるであろう。第1に「生命」概念が近代における「虚構された実体」ないし一種の偶像であり、多くの意味を表現しながら実際には何も意味していない「アメーバことば」(amoeba word)であるという点である。この点につき、彼は次のように述べている。「神学的な意味における偶像とは、聖書にもあると

おり、人間の手によって創造されたものでありながら、われわれが崇拜の対象とし、それに対してわれわれ自身の力を凌駕する力を帰するところのものです…現代における用法を見れば、フリーダムやデモクラシーやリバティーといったことばが、しばしば偶像のように用いられる傾向にあると言えるでしょう。ただし、そうしたことばを実体とみなす人間はいません…一つの生命 a life という場合、私はそのことばに実詞的な意味を付与しています」(イリイチ 1992:380)。

第2に、このように生命に実体的・偶像的な意味を付与することによって生ずる最大の問題は、本来「一個の人格 a person」と呼ぶべき人間存在を、一つの生命に変容させてしまうことである。イリイチによれば、「生命」の概念はもともとキリスト教の伝統に起源を有するものであるが、その意味がねじ曲げられ、偶像崇拜的な化け物じみた概念として用いられるようになるにつれ、「西洋個人主義のヒューマニズム」を基礎づける「人格」という概念が押しのけられるようになる。その結果、人間が「管理しうる資源」として考えられるようになったのである。つまり彼によれば生命とは、「資源に対する制度的管理を広げていくのに都合のよい仮定の最たるもの」であり、例えば医療技術の発展に示されるように「諸制度が新しい管理分野にのり出してきたことによって生じた化け物じみた概念」なのである。また生命を所有の対象として「所有可能な財産」とみなす考え方も、ここから生ずる(イリイチ 1991:272- 282)。

第3に、イリイチは、上述のような生命の概念を、「生きた自然」という生氣論的自然観の凋落とともに出現した、近代に特有の概念としてとらえている。彼は、制度的管理の対象としての「生命」を「生き生きとしていること aliveness ではなく生存 survival に力点を置いている」概念であると指摘する。これに対して、西洋におけるソクラテス以前、およびそれ以後の哲学的伝統では、自然とは「生きていること—一つの生命 a life ではなく、生きていること alive—であり、一つの母体ないしは子宮のようなもの」であると考えられてきた。ところが近代とともに自然はそうした生氣を失い、「自然の死」がもたらされる。彼によれば、近代におけるこの「自然の死」が、「生命なるものが管理されるべき対象として、また人工知能のように製造されることさえ可能な対象として現れるような文化的空間」を生み出したのである。(イリイチ 1992:391-402)。

以上がイリイチによる生命批判の要点である。ヴァンダナ・シヴァは自らのコモンズ論を生命概念によって基礎づけ、イリイチは生命を自然と人間を管理・抑圧する概念として批判する。通常、両者はコモンズ主義者として同様の政治潮流に属すると認識されているが、生命概念については、全く正反対の立場に立っているのである。

もちろん両者の間には、実質的な共通点も存在する。とくに、自然の本質をアライヴネスに求めていること、生命を管理可能な資源とみなすことに反対であること、自然の私的所有に批判的であることなどは、重要な共通点である。例えばヴァンダナ・シヴァは、農作物の種子を生命の象徴ととらえ、モンサント社の遺伝子組み換え作物など、多国籍企業による種子=生命の私有化と独占的支配に対する批判に大きな労力を傾注してきた。こうした活動は、

イリイチの主張からしても全く支持すべきものであろう。

しかしながら、両者の理論内容をより子細に検討するならば、そこには両者の生命観の相違をもたらしている幾つかの重要な要因もまた存在する。第1に、イリイチの生命観にみられる「人格主義」と呼ぶべき性格である。イリイチが生命の概念に批判的なのは、上述のように、それが「西欧個人主義のヒューマニズム」の基盤を掘り崩すと考えられるからである⁽¹⁰⁾。これは彼が、人間を単なる生命ではない人格とみなす「人格主義」こそが、生命の私有化と管理化に対する最大の歯止めになる、と考えていることを意味している。しかし、非西欧に自らの思想的ルーツをおくヴァンダナ・シヴァにあつては、そうした西欧的ヒューマニズムこそ、他の生物種に対して人間を特権化し、人間による自然の搾取を正当化する人間中心主義的な考え方として批判の対象になるのである。確かに、イリイチが危惧するように、市場原理による自然の私有化・管理化に生命の概念が利用される危険性は現実存在する。だからこそ、彼女は多国籍企業による生命の象徴たる種子の管理操作を、全力を挙げて批判したのであった。

第2の相違点は、両者の「身体」に対する態度である。『脱病院化社会』などの著作にみられるように、近代における医療技術を通じた身体の管理を批判することは、イリイチの理論活動の大きなテーマの一つであった。彼は『生きる思想』においても、健康が専門家の手によって操作的に管理される現状を批判し、『からだづくり』にいそしむ現今の流行と、身体に受肉した文化にもとづく伝統に根ざした技術とを明確に区別することほど、今日重要なことはない(イリイチ 1991:269)と論じている。しかしながら、彼における身体はあくまで人格としての人間に受肉した身体であつて、ヴァンダナ・シヴァにおける身体のように、他の生物種や自然との連続性を有する「連続体」としてのそれではない。身体に対する近代の態度を批判する彼の視点は、身体に対する合理的管理を忌避する反プロテスタンティズム的な感性から生じているのであつて、ヴァンダナ・シヴァが批判する人間と自然、心と身体二分法は、イリイチの人格主義においてはむしろ前提となっているように思われるのである。

第3の相違点は、両者の「宇宙」に対する態度である。すでにみたように、ヴァンダナ・シヴァの生命論的コモンズ論は、人間が宇宙の一部であり、生命を通じて宇宙と繋がっているという、宇宙生命論的な内容を有している。これに対して、イリイチの議論には、宇宙概念に対して批判的な「反宇宙主義」とでも呼ぶべき傾向がみられるのである。イリイチは、宇宙から撮影した青い地球の写真を取り上げ、「(人類が) これまで獲得してきた眺めのうち、もっとも暴力的な眺めとは、地球をその外部からみた眺め」であると批判する。その眺めを獲得するために、大量の資源が犠牲とされたからである。近代においては、この地球の写真が新たな偶像ないし「聖域 sacrum」としてあがめられ、世界の全面的な管理が正当化されると彼は主張する(イリイチ 1992:394-397)⁽¹¹⁾。

自らの出自であるインドや世界の先住民文化にみられる非西欧的自然観に依拠し、西欧的家父長主義の批判から出発して自らの生命論的コモンズ論を築いたヴァンダナ・シヴァの議論と比較すると、総じてイリイチのコモンズ論には、カトリック的キリスト教の立場からす

る人間中心主義的な観点が散見されるように思われる。逆に言えば、上述の非人格主義や連続体としての身体概念、そして宇宙主義は、西欧的文脈とは異なる彼女のコモンズ論の独自の特徴を示すものと言えよう。

おわりに ヘゲモニー的概念としての「生命」

以上本稿では、ヴァンダナ・シヴァの生命論的コモンズ論を検討することを通じて、「生命」の概念をコモンズ論に導入することの可能性について考察した。従来の実体論的コモンズ論であるポランニー理論との比較で言えば、生命の概念がコモンズ論にもたらした最も重要な視点として、「多様性」と「生命のグローバリズム」を挙げることができるであろう。前者は、ポランニー理論が市場原理の主要な否定的作用として指摘していた私有化・商品化だけでなく、市場原理には合理化・画一化・均一化という生物的・文化的多様性を破壊する作用があることを指摘する。後者は、市場原理に基づくグローバリズムに対して単なる反グローバリズムを対置するのではなく、市場原理のグローバリズムに対抗しうる、多様性の論理を内包し宇宙論までも射程に入れたより視野の広いグローバリズムの観点を提示する。生命のグローバリズムは、伝統回帰でも進化でもなく、逆説的・超越的に近代を乗り越えようとするのである。

ただし、コモンズ原理の中核に生命の概念を据えるという戦略は、同時に一種の危うさをも有している。イリイチの生命批判は、生命の概念が近代資本主義によって形成・利用されてきた側面があることを指摘している。生命という概念は、コモンズ原理の専売特許ではないのである。ヴァンダナ・シヴァの生命論的コモンズ論が、企業グローバリゼーションの死の文化をもたらす反生命的性格を強調しているのとは対照的に、市場原理のイデオログたちは、市場の有する秩序形成力や多様性を生み出す力を強調してきたし、その際には、例えばベルグソンの生命理論などが積極的に活用されてきたのであった。このことは、やはり生命という概念が実際には何も意味していない「アメーバことば」であることを示しているであろうか。私はむしろ、生命という概念は一種の「ヘゲモニー的概念」、つまり市場原理とコモンズ原理が世界における支配的地位を求めて闘争する場の一つであると考えている。市場原理のもたらすとされる「生命」や「多様性」とは何か。それらの本性は、本当に生命なのか、それともコモンズ原理の主張するように、死をもたらす反生命なのか。その解明は今後の課題である。

注

(1) 例えば以下の記述を参照。「人間の労働力を処理する場合、このシステムは、労働力というレッテルの貼ってある肉体的、心理的、道徳的存在としての『人間』を処理することになるのである。文化的諸制度という保護の被いがとり去られれば、人間は社会に生身をさらす結果になり、やがては滅びてしまうであろう。…自然は個々の元素に分解され、近隣、風景は汚され、河川は汚染され、…食料、原料の生産力は破壊されるだろう」(ポランニー 1957:97-98)。なお、論文「制度化された過程としての経済」では、ポランニーは、「経済的」という言葉の「形式的な意味」と区別されるところの「実体的な意味」として、

「人間と自然環境および社会環境とのあいだの代謝」ないし「人とその環境とのあいだの、制度化された相互作用の過程」といった定義を与えている（ボランニー 2003:361, 369）。

(2) 以上は、廣松渉他編（1998）『岩波哲学・思想事典』（岩波書店）の「実体」の項を参照。なおデカルトは『哲学原理』において実体を「それが存在するのに何ら他の事物を要さないような仕方 で存在する事物」（デカルト 1644:207）と定義し、さらに神以外の実体として思惟実体と延長実体（精神と物質・身体）を挙げているが、両者のうち思惟実体をより重視している。例えば『省察』における以下の記述を参照。「われわれはいかなる物体も可分的なものとしてしか理解せず、逆に、いかなる精神も不可分なものとしてしか理解しない」「人間身体は、他の物体と異なっているかぎり、もろもろの器官の一定の配置と、他の同じような偶有性だけから構成されていること、しかし人間精神はそうした偶有性から成っておらず、純粋な実体であるということに注意すべきである」（デカルト 1642:28）。ライプニッツの実体に関する認識とその活動性との関連については、例えば『モノドロジー』47・48における以下の記述を参照。「神だけが、原初的な「一」、つまり本源的な単一実体で、創造されたモノド、つまり派生的なモノドはすべてその生産物にほかならない」「神の中には、万物の源泉である力と、多様な観念を含んでいる知性と、常に最善を選ぶようにする原理にしたがって、変化や生産を引き起こす意志がある。この3つは、創造されたモノドの中にある3つのもの、すなわち主体つまり基礎と、表象の能力と、欲求の能力に対応している」（ライプニッツ 1714:449）。またスピノザは『エチカ』の中で実体を「実体とは、それ自身のうちに在りかつそれ自身によって考えられるもの、言いかえればその概念を形成するのに他のものの概念を必要としないもの、と解する」と定義し、実体＝神の起成原因としての性格について「神の本性の必然性から無限に多くのものが無限に多くの仕方 で…生じなければならぬ」（スピノザ 1677:37, 59）と述べている。一方、こうした実体概念の実在性についてはその後バークリ、ヒューム、カントらによって批判的に論じられている。例えばヒュームは、『人性論』の中で次のように述べている。「個々の性質の集合の観念と別個な実体概念はなく、実体について物語り或いは論究するときこれ以外の如何なる意味もないのである。いったい、実体概念も様相概念も、想像によって接合されかつ特定の名称を設定された単純概念の集合にすぎなく、我々はこの名称によってその集合を自他に思い出させることができるのである」（ヒューム 1739:47）。これらに見られるように、実体概念をめぐる諸問題として、①実体における物質と精神の関係、とくに身体をどう位置づけるか、②実体がどのように具体的なものとして現れるのか、一と多（多様性）との関係、あるいは一が多に展開する際の推進力、③実体を、単なる概念としてではなく、実在として認めうるか、といった問題が挙げられる。以上は身体・多様性・実在性とまとめられるが、これらの諸問題は実体論的コモンズ論においても中心的な問題となる。

(3) この点については、以下の記述を参照。「アダム・スミスの出現で、自然と女たちがつくり上げた富は、おもてからは見えなくなってしまった。労働、とくに男子労働がすべての生活上の必要物と便宜を提供する根源となった」「変換に役立つ生産的な力といえば、西欧の男子の労働だけが連想され、経済開発というのはこの仮定のもとに世界を改造することとなった」（シヴァ 1988:61-62）。労働価値説における「労働」を、西欧男子の労働と規定し断罪するこのラディカルな見解は、その妥当性はともかくエコフェミニズムの面目躍如という感じがする。

(4) 例えば以下の記述を参照。「進歩と開発のカテゴリーとされる断片化と均一化 fragmentation and uniformity は、『生命の網 web of life』が織りなす生きる力とそれが構成する要素とパターンの多様性を破壊する」（シヴァ 1988:18）。

(5) 実際、われわれの問題関心にてらして、ウェーバーの方法は、マルクスのそれに比べて幾つかの優位性を有しているように思われる。山之内（1997）を参照しつつその主要な点を挙げるならば、第1に、資本主義を人類の普遍的発展の一階梯とみなすのではなく、それがプロテスタンティズムというある特殊な合理化の形式にすぎないことを指摘し、比較宗教学の観点からすれば合理化には多様な型があることを示した点。第2に、普遍的合理化を価値的に善とする素朴な近代主義的信念を疑い、資本主義のエートス論や官僚制の分析に代表されるように、近代主義に対する批判理論として自らの合理化論を展開した点。第3に、システムを支える内面的な動機付けや、行為を動機付けている文化的意味への理解など、経済からは独立した主観の領域、とくに「世界像」に関する問題を社会科学の対象に据える理論的装置

を有している点。総じて、マルクスが「近代知の完成者」として位置づけられるのに対し、ウェーバーは近代知の批判者でありその限界の自覚者であった点（山之内 1997:5, 14）に、マルクスに対するウェーバーの優位が認められる。

(6) ここでシヴァが述べている「連続体 continuum」の概念が、アインシュタインの相対性理論における「時空連続体 time-space continuum」を念頭においていることは明らかであろう。

(7) 例えば以下の記述を参照。「グローバリゼーションによって、生命の持続と分かち合いを保証していた女性中心の世界観、知識体系、生産体制と、戦争と暴力に基づく家父長主義的な知識体系、経済体制とが、相争うようになってしまったのです…家父長主義は古くからある問題ですが、それが生まれるきっかけが新しいのです」（シヴァ 2005:236-237）。

(8) キルケゴールのエッセイ「天才と使徒との相違について」における以下の記述を参照。「天才と使徒とは質的に違ったものであり、その規定は、それぞれその質の領域を生れ故郷とする。すなわち内在性と超越性の領域である。…天才は、したがって、もたらすべき新しいものをもっているが、その新しいものは人類一般に同化されるとまた消え去っていく。それは「天才」という差異が、永遠のことを考えるや否や消え去るのと同様である。使徒はもたらすべき新しいものを逆説的にもっており、その新しさは、本質的に逆説的であって人類の発展にかかわる先取りといったものではないから、いつまでも存続する」（キルケゴール 1847:128）。

(9) その他、政治哲学者ハンナ・アレントも、生命概念に批判的であった論者の一人である。彼女の生命概念批判は、主著『人間の条件』（1958）の労働理論にみることができる。以下本稿では、アレントの生命批判については、注で適宜言及することにする。

(10) これは、アレントによる生命批判の中心的な論点でもある。『人間の条件』は政治哲学の立場からする一種の近代批判であるが、周知のように彼女は本書において、私的領域－公的領域という人間の2つの活動領域と、労働 labor、仕事 work、活動 action という人間の3つの活動力の存在を指摘し、近代の特徴ないし問題点として、私的－公的領域という構造の消滅と「社会」の勃興、私的領域の拡大と世界喪失 worldlessness、仕事・活動に対して、もっとも私的な行為である労働が優位を占めるようになること、といった諸点を指摘した。彼女によれば、生命の概念は、こうした公的領域の消滅と労働優位の思想の表現に他ならない。例えば以下の記述を参照。「生命の祝福は、全体として、労働に固有のものであって、仕事の中にはけっして見いだされないものである」「世紀の変わり目に（ニーチェおよびベルグソンによって）労働ではなく生命こそ「すべての価値の創造者」であると宣言されたとき、この生命過程の純粋なダイナミズムに対する賛美によって、労働や生殖のような必要によって人間に押し付けられる活動力にさえ現れる最小限の自発性も排除された」「近代は、世界ではなく生命こそ、人間の最高善であるという仮定のもとで生き続けた」（アレント 1958: 164, 175, 494）。

(11) アレント『人間の条件』にも、反宇宙主義的な視点がみられる。序論では、人類の宇宙進出が「人間の条件」からの脱却をめざす「世界疎外」の現れの一つとして批判的に論じられている。また以下の記述を参照。「もう一つ、もっと重大で危険な兆候がある。それは、人間がダーウィン以来、自分たちの祖先だと想像しているような動物種に自ら進んで退化しようとし、そしてじっさいにそうなりかかっているということである。要するに、もう一度アルキメデスの点の発見に戻り、その発見を…人間自身と人間がこの地上で行っている事柄に応用するとどうなるだろう。ただちに明らかになることだが、遠く離れた宇宙の一点から眺めると、人間の活動力はどれも、もはやどんな活動力にも見えず、ただ一つの過程としか見えない」（アレント 1958:500-501）。ここでは、宇宙的な視点が人間の活動力の区別を消滅させ、一種の物質的過程に還元されてしまうことが批判的に述べられている。これは、宇宙的視点が人間と自然の生命論の一体性をもたらすというヴァンダナ・シヴァとは正反対の感性であり、その意味でイリイチの人格主義と通ずるところが大きいと言える。

参考文献

外国語文献で邦訳のあるものは、原則として（ ）内に原著の発行年を、[]内に訳書の発行年を示した。ただし、論文集などでは（ ）内に訳書の発行年を記したものがある。引用に際しては訳書を適宜参照したが、引用文は訳書の訳文と必ずしも同じではない。

アレント、ハンナ (1958) 『人間の条件』 志水速雄訳、ちくま学芸文庫 [1994]。

イリイチ、イヴァン (1991) 『生きる思想 反＝教育／技術／生命』 桜井直文監訳、藤原書店。

イリイチ、イヴァン (1992) 『生きる意味』 デイヴィッド・ケイリー編・高島和哉訳、藤原書店 [2005]。

キルケゴール (1847) 「天才と使徒との相違について」 梶田啓三郎訳、キルケゴール 『現代の批判』 岩波文庫所収 [1981]。

シヴァ、ヴァンダナ (1988) 『生きる歓び—イデオロギーとしての近代科学批判』 熊崎実訳、築地書館 [1994]。

シヴァ、ヴァンダナ (2005) 『アース・デモクラシー 地球と生命の多様性に根ざした民主主義』 山本規雄訳、明石書店 [2007]。

スピノザ (1677) 『エチカ (上)』 畠中尚志訳、岩波文庫 [1951]。

デカルト (1642) 『省察』 山田弘明訳、ちくま学芸文庫 [2006]。

デカルト (1644) 『哲学原理』 山田弘明・吉田健太郎・久保田進一・岩佐宣明訳、ちくま学芸文庫 [2009]。

ヒューム (1739) 『人性論 (一)』 大槻春彦訳、岩波新書 [1948]。

ポランニー (1957) 『大転換』 吉沢英成・野口建彦・長尾史郎・杉村芳美訳、東洋経済新報社 [1975]。

ポランニー (2003) 『経済の文明史』 玉野井芳郎・平野健一郎編訳、ちくま学芸文庫。

山之内靖 (1997) 『マックス・ヴェーバー入門』 岩波新書。

ライプニッツ (1714) 『モノドロジー』 清水富雄・竹田篤司訳、『世界の名著 25 スピノザ ライプニッツ』 所収 [1969]。